

万載まんざい

狂歌集・上

宇田敏彦・校註

清長画



校註者略歴

宇田 敏彦 (うだ としひこ)

1934 年 愛知県に生まれる。

1961 年 早稲田大学文学部卒業

《現在》 戸板女子短期大学教授

論文・校訂 天明狂歌、黄表紙の世界、未刊隨筆百種、燕石十種、
江戸の戯作絵本、春町作黄表紙の虚像と実像他

〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速
お取替致します。

© Toshihiko Uda 1990
Printed in Japan

現代教養文庫 1330 万載狂歌集 上

1990 年 1 月 30 日 初版第 1 刷発行

校註者 宇田 敏彦

発行者 宮川 安生



発行所 株式会社 社会思想社

東京都文京区本郷 3 の 25 の 13
電 話 (03) 813-8101 (代表)
振替東京 6-71812 〒 113

ISBN4-390-11330-5

三松堂印刷・小林共文堂

图书馆
章

万載まんざい

狂歌集・上

宇田敏彦・校註

津長画





390-11330-5 C0193 P640E

社会思想社 定価640円（本体621円）

万载狂歌集

〔解題〕

外題は、上冊に「万載狂歌集 四季 離別／騷旅 哀傷」、下冊に「万載狂歌集 賀 恋 雜／釈教 神祇」とある。半紙本二冊で、上冊九卷、下冊八卷（但十三卷を欠く）よりなる。選者を四方赤良（大田南畝の狂名）と朱棨菅江の両名とするが、實質的に選に当たったのは南畝と考えてよい。上冊に四方赤良と朱棨菅江の署名を持つ二つの仮名序があり、下冊末尾に四方赤良の真名後序と橘のやちまたと署名のある和文跋を付す。板元には、江戸の須原屋伊八、京都の本家須原屋仕入店、大坂の柏原屋与左衛門の三軒が名を連ねている。底本には初版本と見られる大妻女子大学図書館蔵本を用いたが、上冊の外題に一部剝落があったり、上冊の巻四と巻六にそれぞれ一丁の落丁があったりするので、東京都立中央図書館の加賀文庫蔵本などの諸本によって校合した。

江戸の狂歌人による最初の狂歌撰集で、江戸の当代人の作ばかりでなく、暁月房や貞徳らの古人の狂歌も、それぞれの家集によって採るなどして、古今の狂歌人二百三十余人の歌、七百四十八首を収める。その成立には、江戸狂歌界の先人で、旧知の友でもあった唐衣橘洲との確執があり、橘洲が南畝、菅江を除外して『狂歌若葉集』の編集を始めたことを知り、急遽、天明二年四月に撰集作業に入ったものと考えられる。幅広い撰歌態度と企画力に寄せる自信のほどは、王朝時代最後の勅撰和歌集で、源平争乱の数々のエピソードで名高い『千載集』に倣ったその題名や部立、配列に窺われ、三河万歳をかすった題名や一首の配列順序などは、それ自体で見事な江戸市井の庶民生活を活写、再構築し、戯作的世界を作り上げていて、狂歌史上、これほど選者

の見識と批評眼が透徹した、最も首尾の整った狂歌アンソロジーはないといってよい。しかしながら、何分にも半年という短期間の撰集作業であったため、いかに編集の才に恵まれた南畝とはいえ、いくつかの齟齬が生じている。古人の作の選択範囲がきわめて限定されたものであったことは、おそらく、南畝がもっとも心を残した所であつたろうし、序で部立を巻一から巻十七と数え立てながら巻十三を欠き、本来、巻十五と刻すべき雑体の部を雑歌の下の一部とするほか、上冊の七、八丁の所で一丁落丁があるなどの本作りの上での失敗が見られるが、全体の出来映えからいえば、これらは取るに足りない瑕瑾といって差し支えない。事実、大変な評判を取って、ライバルの『狂歌若葉集』を圧倒するとともに、江戸に空前の狂歌ブームを巻き起こすこととなり、南畝がその随筆『奴やこ奴だに』で「此集あまりに行れければ、橘八衢やちまたの跋をのぞきて市中に行ふ」というほどに、『万載狂歌集』は好評裡に多くの版を重ねていったのである。

〔凡例〕

一 漢字、仮名とも原本通りの字体での翻刻を原則とするが、特殊な略字体の漢字は現在使われている字体に改め、合字は漢字、仮名とも現行の字体に分割した。また近似した字体による混乱は文脈によって決定した。

二 仮名の反復記号（、ムムム）は原本のままとするが、漢字の反復を示す踊り字（〃）は「々」に改め、「く」はそのままとした。

三 原本にある振り仮名、振り漢字はそのまま翻字した。また読みの複雑な漢字には（）を付けて仮名を振った。

四 明らかに脱字と思われるものには「」を付けて補った。

五 作者の欄及び詞書の欄が空白になっている場合は、前出の歌と同一人の詠、または同じ詞書を持つ歌である。

六 註は各巻での初出の字句に付けるのを原則とした。

七 一首の解が多岐に渡ったり、複雑な場合には、適宜、補足説明や解釈を施した。

八 古歌については出来るだけ典拠を明らかにし、当代の歌については『狂歌若葉集』との異同を示した。

九 出典が歌合の形式を取るものについては、相対する歌及びそれらに対する判と判詞を添えて置いた。勝、負、持もちとあるのはその判で、勝、負は優劣を、持は優劣の付け難い場合をいい、判詞はその裁定事由であるが、これには抄訳を付けた。

読みが複雑と思われる作者名には、原則として、各巻初出のさいに振り仮名を振ったが、不詳なものには、便宜的に音読みにして付けた。

とくわかにまんざいしふとハ、きミもさかへてます／＼ごきけん、あいきやうありけるあらたまの、としとるはしめにふてとりて、りしやうくんがたまの句々をかうべにのせ、あやんがたちをはくやのきしんが、かたなのこしおれにいたるまで、ゆつりはをくちにあちハひ、五ふのまつを手にもちろん、よろつのたからたからかに、世にきこえたるくさ／＼のことは、かきあつめすといふことなし。

【とくわかにまんざい】徳若に万歳。徳若は「常若」^{とこわか}の転で、常に若々しく万年も長寿を保つようにとの意を持つ祝詞で、これに『万載狂歌集』の意と三河万歳の意を掛ける。徳若の語は三河万歳の詞章にも用いられるもので、以下諸処に三河万歳の文句を振^もった語句が使われている。【あいきやう】愛敬。興趣、面白味。【あらたまの】新玉の。枕詞で、年、月、日、夜、春などに掛かる。【りしやうくん】李少君。中国、漢代の方士（仙術家）。竈^{かまど}を祭つて長生を求める術で武帝の信任を得た。大変な長寿で、当時、既に七百歳であったといい、古事に精通してしばしば帝に進言し、多くの功績があった。「玉の句々」はこの古事の進言をさし、本書の第二巻、十二巻、十六巻を除く各巻巻頭に、天明以前の狂歌師の歌を置いたことをいうかと思われるが、以下の修辭はきわめて難解であるといわなければならない。山崎美成の随筆

『海録』卷二に、次の註に触れて「りしやうが玉の冠は李將軍の事也、と大田蜀山翁がいはれし也」とあるが、下冊末尾の真名序に、「李少君之玉ノ得不可ヲ古ル鍊ノ店ニ探リ」とあれば、いかがなものか。存疑。【あやんがたちをばく】三河万歳の語句であるが、意不詳。前記の『海録』にも不詳とするが、柳亭種彦の言として「ある隨筆に、あやの小路の鍛冶某の、年ごとに太刀を禁裏へ奉る事あり。それをいひしもの也。あやんといへるは音便なり。その下に、はこんやのゆづり葉といへるも、貌姑射のゆづり葉といふを、音便にていひしなるをもて、しるべし」といい、また「あるまなこと表題せる筆記に、綾の小路に定利と云鍛冶あり。禁裏の御儀式に用ひらるゝ太刀は、此定利が打なり。綾の小路にすむゆへに、俗よんで綾が太刀といふ。万歳詞に、あやんがたちをばいて、と唄ふは是なり。是正説なり」とある。「天明三年中刊行の『狂歌師細見』の跋にも「筆のあやんがたちいれに」とあるが、ここはあやめがたち（菖蒲太刀）の幼児語に転用するか。菖蒲が太刀は菖蒲刀ともいい、端午の節句に飾る太刀で、木刀に金銀をちりばめて華美に仕立てたものであるが、元来は、菖蒲を束ねて刀の形にしたもの、または木刀に色紙や布を捲いたもので、子供たちが帯び歩き、戦の真似事などをした。は

くは刀を佩く^はの意で、これに箔屋^{はくや}を掛ける。箔屋は金銀などの箔打を業とする店で、木刀などに箔を置いて真剣に見せかけることなども行つた。【きしん】鬼神。ここは五月飾りとして喜ばれた鍾馗^{しやうき}をいうか。【こしおれ】腰折まん中辺で折れ曲がつた様の意に、腰折歌の意を掛ける。腰折歌は、和歌で上の句と下の句との続き具合の悪いものをいい、転じて下手な歌をいう。【ゆつりは】樸。常緑の喬木で、旧葉が新葉が出てから落ちるので、新旧相譲るに似るとして賞し、親子草ともいって、正月の儀にこれを用いて代々の繁栄を祝う。これを口に味^{あじわ}うというのは、樸の樹皮を驅虫薬として用いたことによるか。【海録】にいう藐姑射^{はくこや}は、藐姑射の山ともいい、中国で不老不死の仙人が住む靈地とされる。【五ふのまつ】五葉の松。松の一種で、比較的短い針葉が五本ずつ束になって小枝に密生するのでこの名があり、江戸では姫小松ともいって、盆栽仕立てとして愛好された。若々しく長生きすることと、子孫繁栄の象徴。【くさく】種々。品数や等級が様々なこと。

一本のはしらハ一花ひらけ、二本のはしらハ二月、三月、三本の柱ハさんふくのなつ、四本のはしらハ新秋の天、五本のはしらハ梧桐のつゆ、六本のはしらハむつのはな、

七本の柱ハなこりをおしみ、八本のはしらハやま川をこえ、九本のはしらハ九相(くそう)をかなしみ、十本の柱ハ十かへりをいはひ、十一本、十二本の柱ハ十一、十二のふたつもしうしのつのもしこすいもし、十三本、十四本の柱ハ十三なゝつななことによらず、十四まち／＼とり／＼のうた、十五本の柱ハ三五の十八短歌の句々、旋頭(せんと)、おり句、廻文の哥、十六本の柱ハいさよふ心の月を觀し、十七本のはしらハたちまち神祇の部となれり。あはせて七百あまりの哥、十七の巻柱、かの三神のまもり神、ゑいやつとおつたてたれハ、雨がふれともかミくちす、風かふいてもふきちらす、日ハてるともほしミせにいてす、むしハくふとも反古にならず。

【一本のはしら】一本の柱。以下、三河万歳の祝詞の一つ「柱立」の章句により、本書の部立のあり方を述べる。【一花ひらけ】一輪の花が咲いて、よくやく春になったというほどの意で、花は梅の花である。【さんふく】三伏。夏の最も暑い期間で、夏至後の第三の庚かのえの日を初伏、第四の庚申かのえさるの日を中伏、立秋後最初の庚の日を末伏という。【梧桐】青桐の異称。十二葉を生じるといい、その芽の出方から年の正閏を知る木といわれた。桐は新秋七月になるとその葉を落とすため、初秋の季語として用いられるが、ここは落葉した桐に置く露の見立てで、秋も深まった意を示し、部立が秋下であることを表す。

【むつのはな】六つの花。雪の異称。雪の結晶が樹枝状六花からなることによる。【九相】仏教で、人の屍が土灰と化すまでに辿る九つの姿（脹相、壞相、散相など）をいう。【十かへり】十返。十回繰り返すことで、一般に、千年に十回花を付けるといふ松をいい、転じて、長い年月を祝う言葉として用いられる。【ふたつもしうしのつのもし】二つ文字、牛の角文字。形から出た文字の謎で、恋をいう。【こすいもし】御推文字。推量の女性語で、お察しの通りというほどの意。【三五の十八】九々算で三五は十五であるが、これを十八と思ひ違えることをいい、算用違いや見込み違いをいう。ここは部立が雑体であることをさす。【短歌】和歌の一体。最も一般的な和歌の形式で、五七五七七の五句よりなり、より以上の句数を持つ長歌に対する。【旋頭】旋頭歌の略。和歌の一体で、五七五の句形式を持つ片歌を反復した形の六句よりなる。【おり句】折句。和歌で、仮名文字五字からなる物名などを、各句の頭に一字ずつ読み込むことをいう。【廻文】上から読んでも下から読んでも、同じように読める詩句や文章をいう。【いさよふ心の月を觀し】十六夜の月に、進もうとして進まぬ、ためらう心の意を掛け、さらに仏教の基本的觀法の一つ月輪觀（月を描いた軸の前に結跏趺坐して、自らの心が月輪の如

しと観ずること）の意を掛けて、部立が釈教（釈迦の教えの意で、仏教のこと）であることを表す。【神祇】天神（天つ神）と地祇（ちぎ国つ神）の意で、神々をいう。【三神のまもり神】和歌の守護神とされる三神。異説あるが、本書では、住吉神、柿本人麿、玉津島神をいう。【雨がふれとも】雨が降れども。以下、万歳の章句を振る。もじ【ほしミせ】千見世。露天で、大道に品物を並べ売る店。多く古本、古着、古道具などを扱った。【反古】はご字や絵を書き損じたりなどして不用になった紙。

かく舌つゝみうちおはりぬれは、これからそろ／＼まちやらこの、この／＼すゑにもよミつたへかたりつたへ、あそこ／＼からき／＼てがまいるハかひてがまいるハ、まいるハ／＼まいらざらめやも。さくらあめあきらかなる、宝引（ほうびき）のなハもひとふたミつとし、はるのはしめのうら／＼かなる四方赤良しるす。

【舌つゝみ】舌鼓。うまい物を食べた時などに舌を鳴らすしぐさをいうが、ここは三河万歳の縁で、舌を鼓を打つように早く回して、次から次へと喋りまくることをいう。【まちやらこの】三河万歳の囃し言葉で、まっちゃんこともいう。【この／＼すゑ】子の子の末。孫子の末の代。【まいるハ／＼まい

らざらめやも】三河万歳の章句の振り。参らざらめやもは来ないことがある
うか、必ず来るとの意。【さくらあめ】桜雨。桜の花時に降る雨をいい、雨
に天と音を合わせて年号の天明と続ける。【宝引】正月の遊技の一。籤引き
の一種で、数本の縄を引かせ、先に橙^{だいだい}などの付いたものを当り籤とする。
【四方赤良】編者たる大田南畝の狂名に、東西南北の方角、転じて世の中の
意を掛ける。